「日々の理科」（第 2384 号）　2021,-1,21

「小笠原の植物（２）」

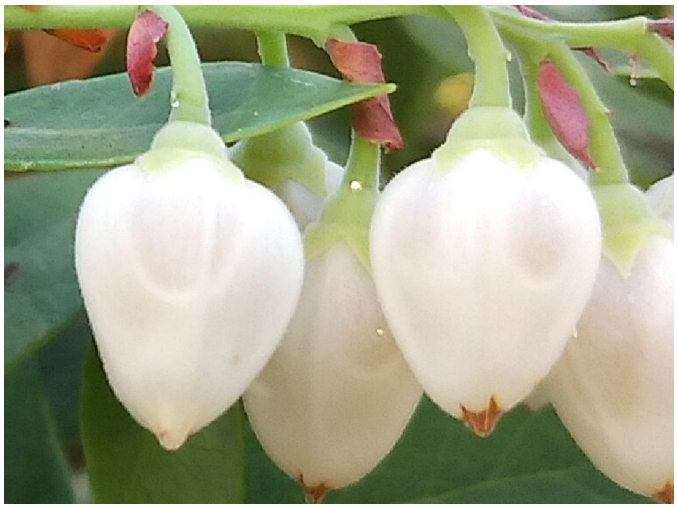
お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

小笠原諸島の生物---特に固有種には、動物の場合「オガサワラ」、植物の場合「ムニン」を冠する種類が多い。「オガサワラ」は「小笠原」のカタカナ表記なのでストレートでわかりやすい。「ムニン」は小笠原諸島の古い呼称「無人島（むにんじま）」に由来する。「ムニンシュスラン」「ムニンネズミモチ」　「ムニンノボタン」など、約 50 種を数える。動物と植物で固有生物に冠することばが異なるのが面白い。

小石川植物園の大温室にも、「ムニン植物」がいつくか展示されている。もちろん、鑑賞用ではなく、植物学や分類学の研究用である。これは「ムニンシャシャンボ」という面白い名称の植物である。

ムニンシャシャンボ *Vaccinium boninense* はツツジ科の常緑灌木で、漢字では「無人子子ん坊」と表記する。これは、小さな実がたくさんつく様子を表しているものらしい。種名板には「絶滅危惧Ⅱ類（ＶＵ＝危急）」と記されている。この種に限らず、隔絶された離島に生息する固有種は、外来種の来襲によって、あっという間に絶滅の危機に瀕することが多い。

幸い、私が見に行った時は花をつけていた。「ドウダンツツジ」の花にそっくりである。「よい香りがします」の札もあったので、マスクのまま鼻を近づけると、爽やかな甘い香りがした。花の香りは、主として送粉（花粉の伝播）の為に、昆虫や鳥類を誘引する為のものだ。それに対し、何の恩恵も与えないであろう我々人類が「良い香り」と感じるのは不思議なことである。恐らく、植物のほうがヒトに合わせたのではなく、ヒトのほうが「蜜のある花は良い香りがする」と感じるように嗅覚が進化したのだろう。



植物園に行くときは、ルーペを持参したほうが良い。私はこの日も持参を忘れてしまった。しかし、最近のスマホのカメラは小型顕微鏡なみに性能が良い。蝋細工のような花についている、細毛まで写っていた。